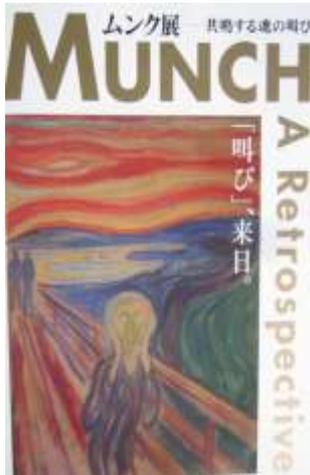


ムンク展 ー共鳴する魂の叫び

東京都美術館（東京・上野:公園） 2018.10.27～2019.01.20



「エドヴァルド・ムンク」(1863～1944)は、世界で最もよく知られる名画の一つ《叫び》を描いた巨匠で、愛、絶望、嫉妬、孤独など人間の内面を強烈に描きだした絵画は、20世紀における表現主義の潮流の先駆けとなった。

本展は、画家の故郷ノルウェー・オスロ市立「ムンク美術館」が誇る珠玉の収集品を中心に、「約60点」の油彩画や版画など「約100点」の名作品が展示されている。

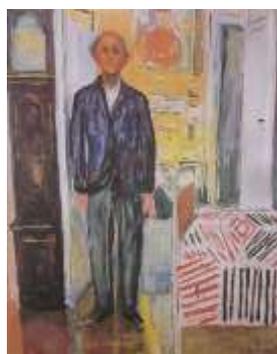
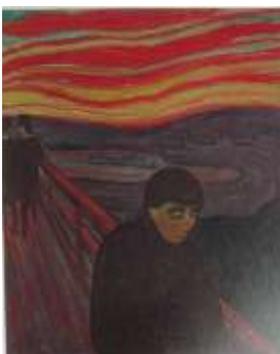
その内訳は、故郷の自然を捕らえた美しい「風景画」、「肖像画」、明るい色彩が誇る「晩年の作品」に至るまでの、「ムンク」の生涯の画業を辿る回顧展となっている。

《叫び》 1910年? テンペラ・油彩画・厚紙

画伯の代表作とされる《叫び》は版画以外に4点の作品があり、今回、初来日する作品は、色合いや形を使って愛や嫉妬、孤独や死に対する感情をありのまま作品に表現している。作品は、**手で耳をふさぎ、口を大きく開いて道に立ち尽くす人物と、オスロ・フィヨルドの上に広がる鮮烈な日没の光景で、人間が内面に抱える不安や孤独などの感情が自然と感銘しているかのようである。**

描かれている人物(ムンク)は、叫んでいるのではなく、自然の叫び声(幻聴)に耳を塞いでいたものであるとされ、人が内側に抱える不安や孤独といった感情と周囲に広がる自然があたかも共鳴しているかのように表現されている。

晩年に描かれたとされる本作品に、人物の目に瞳が描かれていないのは、「呼吸し、感じ、苦悩し、愛する、生き生きとした人間を描くのだ」とされている。



《絶望》 1839～94年 油彩/カンヴァス (左)

《自画像、時計とベッドの間》 1940～43年 油彩/カンヴァス (中)

《生命のダンス》 1925年 油彩/カンヴァス (右)